

【プレスリリース】

国文学研究資料館が永井荷風の草稿を購入、デジタル公開 小説『来訪者』草稿

戦時中から戦後にかけて、問題作の創作過程明らかに

2024/3/3 1

国文学研究資料館（以下「国文研」）は、永井荷風の小説『来訪者』の自筆草稿を購入し、高精細デジタル化に取り組み、2024年3月31日に国文研の「国書データベース」にて公開しました。近代日本の代表的作家であり文学・思想に大きな影響を与えた永井荷風の、戦時中から戦後にかけて書き継がれた小説の自筆草稿です。草稿をデジタル公開することで、作家の実像や作風を、あらゆる研究者や読者が検証することが可能になりました。

■永井荷風について

永井荷風（1879～1959）は現在の東京都新宿区に生まれました。東京外国語学校に進学したものの中退、芸道などを修めるうちに小説家として立つことを志します。アメリカ・フランスへの遊学後に発表した『あめりか物語』『ふらんす物語』で文壇を席捲し、慶應義塾文学科教授を務めました。1916年の慶應退職後は隠者のような独居生活と名随筆で知られ、1930年代には『つゆのあとさき』（1931）『濃東綺譚』（1937）などの名作を発表しました。戦後には個人主義を貫いた文明批評家として「荷風ブーム」が起こり、文化勲章を受章しています。1917年から40年以上書き続けた日記『断腸亭日常』とともに、荷風の文業は現在もなお愛され、日本の文学と思想に影響を与えつづけています。

■公開される『来訪者』草稿

今回公開される『来訪者』（1944年執筆・1946年発表）は、岩波文庫『花火・来訪者他十一篇』に収録されるなど、近年評価が高まりつつある作品です。小説は老作家「わたくし」が、旧知の文学青年に旧作「怪夢録」の贋作をつくられ売られていたことを知るところから始まります。物語はしだいに、贋作された「怪夢録」そっくりの事件を贋作者が経験し、その経験を元に「新四谷怪談」という小説を構想し、さらに贋作者の物語を「わたくし」が想像しながら書くという、多層的な構成へと読者を誘いこんでゆきます。

草稿は無罫の和紙135枚を、和装形式で上下巻に製本してあります。墨筆で書かれた後、朱筆や紙を貼る形での訂正がなされた、生々しい推敲の痕を見ることができます。国文研のデジタル化の取り組みにより、荷風の自筆資料のインターネットを通じた閲覧が「いつでも、どこでも、どなたでも、そして無料で」可能になりました。

■デジタル公開の意義

①戦時中から戦後にかけての荷風像を更新

『来訪者』とその草稿は、第二次大戦中から戦後にかけての荷風が、文学技法を磨きなおした過程を如実に明かすものです。草稿は1944年2月19日～4月5日に執筆されましたが、1946年刊行の単行本とのあいだに細やかな字句の改訂があり、「脱稿」後さらに訂正がなされました。この推敲過程には、従来の「江戸情緒を愛したリアリスト」といった荷風のイメージを見つめなおすに足るものがあります。

②推敲過程——「類似と分身の物語」の構想

草稿では、題名「来訪者」が決定する前に、「二人の客」、そして「ふたつ巴」という題が候補に挙がったことがわかります。本作はもともと実在の贋作事件をモデルにしていますが、贋作という題材が、「二つ巴」のマークの登場する泉鏡花『眉かくしの霊』などの怪奇小説を思わせる、「類似と分身の物語」へと結実していったさまを確認できます。

さらに荷風は草稿で、「オリジナル」と「分身」の類似を語るくだりを、慎重に推敲しています。贋作者が「わたくし」のオリジナル小説の女性に似た未亡人・常子に接近するくだり（上・39丁ウラ）や、常子の狂乱の態が怪談ふうに語られる箇所（下・70丁オモテ）には貼紙訂正があります。贋作者が「鏡花風の小説」を書いていると聞いた「わたくし」が聞き込みをするくだり（下・58～65丁）は、作品をいったん最後まで執筆した後で挿入されていました。オリジナル小説・贋作・贋作に似た贋作者の体験・そして贋作者による小説と、複数の物語が交錯する構造を慎重に調整した推敲は、『濃東綺譚』（1937）発表以後の荷風が、さらなる技巧的挑戦に乗り出していたことを示しています。

③デジタル化により、あらゆる場所から高精細画像で検証が可能に

高精細画像によって草稿をオンライン公開することで、新発見の草稿をあらゆる場所の研究者・読者が瞬時に確認することができます。荷風にはヨーロッパ体験があり、漢詩文にも通じていたため、日本全国のみならず中国・アメリカ・フランス・イタリアなど多くの国で研究が行われています。草稿の公開により、戦時下から戦後にかけての荷風像に複数の角度から光が当たり、研究が大いに進むことが期待できます。

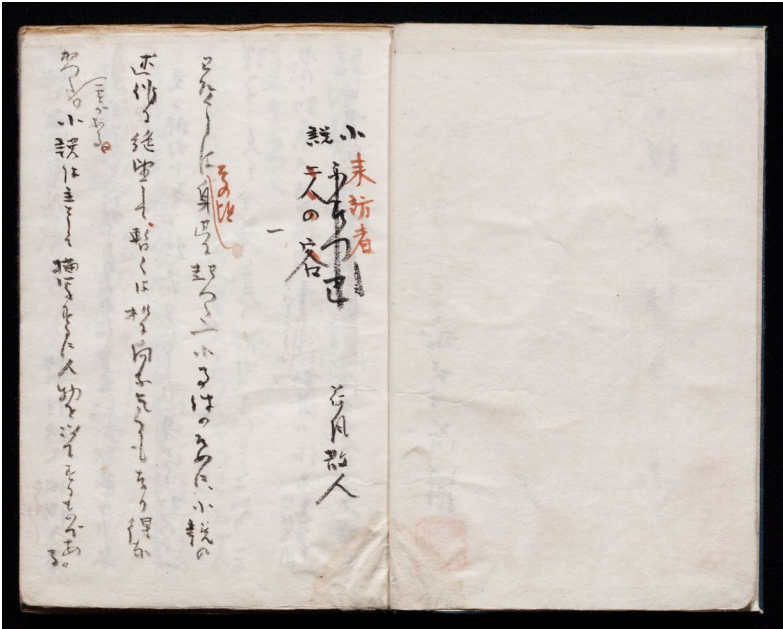
なお今回の画像公開は国文研の事業「近代文献草稿・原稿類に関する所在目録調査と研究」の一環であり、すでに各所蔵機関との協力のもと公開している島尾敏雄・森田思軒・中原中也・武者小路実篤・上野英信ほかの文学者自筆資料とともに見ることで、近代文学における「自筆資料」の具体的な姿を知ることができます。

〈本件に関するお問い合わせ〉

・国文学研究資料館 管理部学術情報課 社会連携係

E-mail: jigyou@nijl.ac.jp/TEL: 050-5533-2910 / FAX: 042-526-8604

■「国書データベース」で公開される永井荷風『来訪者』草稿の画像（部分的紹介）



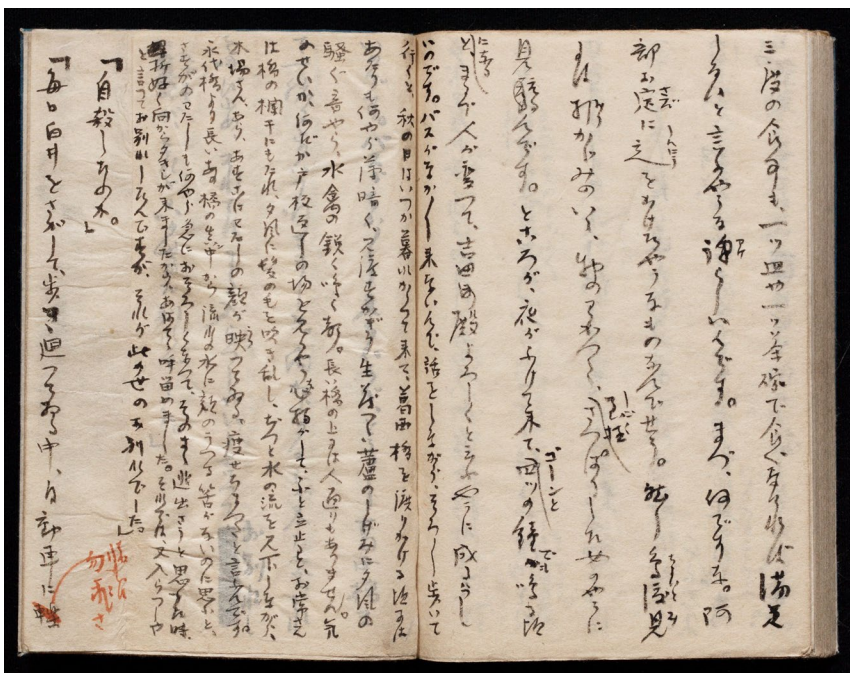
・上巻一丁目オモテ。タイトルが「ふたつ巴」→「二人の客」→「来訪者」と変遷。「二つ巴」は作中に言及された泉鏡花の小説に出るマークで、怪奇小説風の構想が窺える。



・上巻 39 丁ウラ（右側のページ）、物語の鍵となる女性像を貼り紙で訂正（ページ上部に貼り紙の痕が確認できる）。



・下巻 57 丁ウラ～58 丁オモテ（左）と下巻 65 丁ウラ～66 丁オモテ。老作家「わたくし」が贋作者の書いている小説に興味を持ち、聞き込みに出かけるくだりを、後から挿入したことがわかる箇所。草稿は「袋とじ」の形で製本されているため、紙質や本文の内容、「→」による指示からも、後から紙が差し込まれたことがわかる。



下巻 69 丁ウラ（右側）～70 丁オモテ（左側）。物語の末尾近く、物語の鍵となった女性の狂乱が怪談風に語られる箇所は、貼り紙によって全面的に改稿。